

Title	第2回京都大学・慶應義塾大学COE合同シンポジウム： 「心・病・文化 - 医療をめぐる文化と倫理」
Sub Title	
Author	宮坂, 敬造(Miyasaka, Keizo)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2008
Jtitle	活動報告書 Vol.2, (2008.) ,p.51- 52
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章：シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20090300-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第2回京都大学・慶應義塾大学COE合同シンポジウム

「心・病・文化—医療をめぐる文化と倫理」

開催日 2009年1月11日

企画班 論理と感性の先端的教育研究拠点

共催 心が活きる教育のための国際的拠点（京都大学）

企画者 伊東裕司

講演者 マーガレット・ロック（McGill University）、カール・ベッカー（京都大学）

ディスカッション：鈴木晶子（京都大学）、宮坂敬造（本拠点哲学・文化人類学班）

平成20年度京都大学・慶應義塾大学COE合同シンポジウム「心・病・文化—医療をめぐる文化と倫理」が本年1月11日（日曜/12:30-16:30）に京都大学百周年時計台記念館二階国際交流ホールⅠに於いて開催された。京都大学矢野智司教育学研究科長の挨拶および京都大学側拠点リーダー子安増生教授の挨拶と開催趣旨説明、京都大学と慶應義塾大学に通底する研究文化について慶大側渡辺茂拠点リーダーが発言、京大側杉本均教授の司会進行により以下のシンポジウムを行った後、同館一階ラ・トゥールで事後検討交流会がもたれた。シンポジウムでは、北米を代表する医療人類学者であるMargaret Lockカナダ・マギル大学教授が基調講演The Potential Transformations of Self and Society through Biomedical Technologies: A Perspective from Medical Anthropology（生命医学テクノロジー進展に伴って生じる自己変容、社会の変転について：医療人類学の視座から）を行った。北米の臓器移植レシピエントや遺伝子診断を自分の意志でうけた親の調査事例などを引き、生物医学の先進技術の導入により、患者や家族の自己像や出産観等の価値観が変容をうけつつある点、制度と社会的過程がそれに伴って揺れ動いて変化し、全体として統一の実感に基づく価値観で医療行為を自己決定していくのが難しくなる状況が進行している点、出産を受け持つ女性にとって新たな負担が生じるなど、先端医療の社会的様相に問題点が多々見られる点、それらの実態を社会的局面の分析を重視する医療人類学で比較社会的に批判的に捉える意義が指摘された。杉本教授の司会・日本

語訳提示をはさみ〔翻訳・北中淳子准教授担当〕、京大こころの未来研究センターのカール・ベッカー教授（宗教学・生命倫理）が応答講演What should Japanese Medicine Learn from Medical Anthropology?（日本の医療は医療人類学から何を学ぶべきか?）を行った。その内容は、臓器移植とiPS細胞研究の孕む問題点を中心に、日本での末期医療の患者への臨床的面談、マサチューセッツ総合病院での赤子延命の多額な医療費を伴う事例や自死願望学生への相談等の経験、梅原猛先生等との現代医療批判検討会の経験をふまえ、臓器移植資源が限られている状況で配分を政治家主導の立法や経済的負担能力だけの決定要因にまかせている現状と、基底文化をふまえた新たな社会的コンセンサス形成の必要性、米国で先端医療を研修して日本帰国後それを適用するだけに終始する日本の医師・医療の現状への批判が示された。続いて、京大・鈴木晶子教授（教育哲学）がロック先生へのコメントとして、京大学派の系譜に連なる論点がロック先生の講演に深く現れている点、先端科学医療が進むのはよいとしても、直観や身体感覚を信頼して生きる幸福の視点が欠落しがちな現代医療の問題点を指摘した。さらに宮坂敬造は「医療人類学と生命倫理：その相補的關係」と題し、主にベッカー先生への討議として、リスク社会における倫理裁判官的な存在の両義性、文化社会の内部の多様性への着目、文化自体がグローバリゼーションで交錯再帰ネットワーク化するなかでTranscultural位相をどこに位置づけるべきかについて論じ、ロック先生に代表されるマギル大学医療人類学の傑出した学際性は、

各分野の具体的経験をぶつけて論争する開かれた姿勢から展開していることを指摘した。その後、会場質問も交えた質疑討論が活発に行われた〔通訳・北中先生〕。京大側の実証学・臨床学・実践学が結びついた「心が活きる教育」の先端的研究と慶大側の「論理と感性」の先端的教育研究の共通項としては、過剰な近代科学偏重主義が人々の日常生活の親密圏に侵入して感性のバランスが崩れている点、それに伴って心の病が増大している現状への批判点があげられるが、この問題の深層の一端が鋭く浮かび上がる公開シンポジウムとなった。最後に、京大側の準備全般と入念なご配慮に改めて感謝の念を記したい。

(宮坂敬造)

京都大学・慶應義塾大学 COE 合同シンポジウム
心・病・文化—医療をめぐる文化と倫理

2009年1月11日(日) 12:30-16:30
京都大学 百周年時計台記念館
国際交流ホール I
(バス停「京大正門前」より徒歩5分、京大正門に入りすぐ)

講演 マーガレット・ロック教授 (カナダ マギル大学 医療人類学)
「生命医学テクノロジーの発達に伴う自己と社会の愛着の源
医療人類学の視点より」
The Potential Transformations of Self and Society through
Biomedical Technologies:
A Perspective from Medical Anthropology.
通訳 北中淳子准教授 (慶應義塾大学文学部 医療人類学)

応答講演 カール・ベッカー教授 (京都大学こころの未来研究センター)
「日本の医療は医療人類学から何を学ぶべきか
—遺体葬とIPS治療を中心に」
What should Japanese Medicine Learn from
Medical Anthropology?
コメンテーター 京都大学教育学研究科 鈴木晶子 教授
慶應義塾大学文学部 宮坂敬造 教授

連絡先 杉本均
ms2290@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp

入場無料・参加申し込み不要、
質疑は主として日本語で行います。

